



TITLE:

後漢書逸民傳に就いての一考察

AUTHOR(S):

藤田, 至善

---

CITATION:

藤田, 至善. 後漢書逸民傳に就いての一考察. 東洋史研究 1938, 4(1): 45-49

ISSUE DATE:

1938-10-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/138778>

RIGHT:

## 後漢書逸民傳に就いての一考察

藤 田 至 善

後漢書列傳卷七十三に逸民傳一篇あり、野王二王・

向長・逢萌・周黨・王霸・嚴光・井丹・梁鴻・高鳳の傳を收め、次に「論」を挿み、それよりさらに臺修・韓康・矯慎・載良・法真・漢陰老父・陳留老父及び龐公の傳を載せてゐる。「論」を挿んでその前後の人物は明かに區分さるべきであつて、ここではこれをA、Bの二つの型に類別することにする。一體歷代正史の内隱逸の傳あるは後漢書に始る。それ以後の正史多く隱逸傳を立ててゐるが、多くは後者即ちBの型に屬する隱君子にして、何等かの形に於て老莊佛の思想と關聯あるものであり、特に魏晉の清談がその最たるものである。<sup>①</sup>従つて前者即ちAの型は後漢書逸民傳の一特色と考へらるるのである。故にこれについて些か考察を加へ度いと思ふ。

范曄はその序傳に於てこの逸民傳を作つた趣旨を述べ、論語を引用すること四度に及び、その最後に

蓋錄其絕塵不反、同夫作者、列之此篇。

と結んでゐる。即ち後漢書逸民傳を以つて論語に倣つて著作したものであり、特に「子曰賢者避世、其次避地、其次避色、其次避言、子曰作者七人。」（憲問）とあるこの精神を汲んだものとしてゐるのである。

一體論語に於て孔子は隱者に對して如何なる考を有したるかを考察すると、

子路從而後、遇丈人以杖荷蓀云云明日子路行以告、子曰隱者也、使子路反見之、至則行矣、子路曰不仕無義、長幼之節、不可廢也、君臣之義、如之何其廢也、欲潔其身而亂大倫、君子之仕也、行其義也、道之不行己知之矣。（微子）

とあり、孔子の隱者に對する考を知ることが出来る。論語によると隱者は君臣の大倫を破るものではあるけれども、君に仕へると云ふことは其の義を行はなかつた

めであるから、亂世にして道即ち己の理想の行はれざる場合には一時隱逃するの亦不得已とするのである。故に

憲問恥、子曰邦有道穀、邦無道穀恥也。(憲問)

子曰危邪不入、亂邦不居、天下有道則見、無道則

隱。(泰伯)

子曰嘗武子邦有道則知、邦無道則愚、其知可及也、

其愚不可及也。(公治長)

とある。即ち孔子によれば亂世に於てのみ初めて隱者の存在が是認され同情されるのである。「作者七人」については異説あり、包咸は長沮、桀溺、丈人、石門、荷蓀、儀封人、楚狂接輿とし、王弼は伯夷、叔齊、虞仲、夷逸、朱張、柳下惠、少連とし、鄭玄は七を十の誤として伯夷、叔齊、虞仲、荷蓀、長沮、桀溺、柳下惠、少連、荷蓀、楚狂接輿としてゐる。(論語集解義疏卷七)何れが是なるかを知らぬけれども、孔子の言ふ作者七人即ち隱者とは何れも亂世を逃避した人々であるべきである。

次に逢萌以下の傳に於て要項を摘記すると、<sup>②</sup>

**逢萌** 遂去之長安、學通春秋經云云

後詔書徵萌、託以老耄迷路東西、語使者云朝廷所以徵我者、以其有益於政、尙不知方面所在、安能濟時乎。連徵不起。

**周黨** 遂至長安遊學云云

建武中徵爲議郎、以病去職、遂將妻子居睢池。

**王霸** 隱居守志、連徵不至。

**嚴光** 與光武同遊學、及光武卽位、光乃變名姓、隱身不見。云云乃安車玄纁遣使聘之。特徵不至。

**井丹** 少受業太學、通五經云云京師爲之語曰五經粉綸井大春。自是隱閉不關人事。

**梁鴻** 後受業太學云云

妻曰常聞夫子欲隱居避患、今何爲默默無乃欲低頭就之乎、鴻曰諾、乃共入霸陵山中。

**高鳳** 其後遂爲名儒云云、太守連召請、恐不得免、自言本巫家、不應爲吏。云云建初中將作大匠

任隗舉鳳直言云云隱身漁釣。

以上の如くであつて、これ等A型の隱者は何れも太學に於て儒教主義の教育を受け、經學に精通した人々であり、而して君主より常に厚禮を以て迎へられた人

人である。これ論語に言ふ隱者と決して同一ではない、否寧ろ全く反對である。

論語によれば子夏曰仕而優則學、學而優則仕（子張）とあり、仕官と學問とは併行すべきものとしてゐるのである。逸民傳Aの生存時代は光武・明帝・章帝の三代を降らぬ。光武自身は嘗つて長安に學び儒教の教育を受けた。その即位以來禮教を規範とする儒教主義が後漢の人心に浸透し、政治社會經濟何れもこの理念によつて支配された。苟くも太學に學びしもの經學を以て一世を唱導し、廟堂に立ちてその政治を行ふに理想の時期に際會したと言ふべきである。従つてAは論語に言ふ「作者七人」の範疇に入らぬ。而して後漢書逸民傳はこの「作者七人」の語を引用して以て逢萌以下の行爲を理論付けんとしてゐる。范曄は何故に序傳に於てこれを引用したのであらうか。そこでAは范曄以外の人によつて書かれたのではないかといふ疑問が生ずる。後漢書の書法を見ると、紀傳共に必ずその巻尾に「論」「贊」を載せて、范曄自身歴史家としての批判を下してゐる。これぞ後漢書の持つ大なる誇であつて、ここに范曄は時と人とそして運命とに對して深き省察

を加へて、その人生觀、歴史觀を遺憾なく表現してゐる。特に范曄は列傳に於て人物の類型を捕ふことに苦心したのも全くこれがためである。然るに逸民傳には「論」を中間に挿み、而かもその「論」は全くその父范泰の語を引用してゐる。

論曰先大夫宣侯嘗以講道餘隙、寓乎逸士之篇、至高文通傳（高鳳字文通）、輟而有感、以爲隱者也、因著其行事而論之曰古隱逸其風尙矣、潁陽洗耳、恥聞禪讓、孤竹長飢、羞食周粟、或高棲以違行、或疾物以矯情、雖軌跡異區、其去就一也云云。

この論によると范泰既に逸士之篇を作つたことが解るのであつて、更らに一步進んで考へるなれば范泰の逸士之篇がそのまま後漢書逸民傳に採用されたのではないかと考へらるるのである。今宋書范泰傳を見ると、初爲太學博士（中略）明年建國學、以泰領國子祭酒云云、高祖甚賞愛之、然拙於爲治、故不得在政事之官、遷護軍將軍以公事免云云。

とある。後漢書逸民傳中のAの人物と范泰との間には一脈相通するものがあるを知るのである。范泰が感憤して逸士之篇を作つたのも全くこれがためであつて、そ

の全部はそのまゝ後漢書逸民傳前半に襲用されたものと見るべきである。即ち逸民傳一卷は前半と後半と異つた類型の人物が收録されてゐて、これ全く父子好尚の相違といふべきである。

#### 前漢書儒林傳贊に

自武帝立五經博士、開弟子員、設科封策、勸以官祿、訖於元始、百有餘年、傳業者浸盛、支葉蕃滋（中略）蓋祿利之路然也。

とあり、班固は前漢一代の經學を以て祿利之道と斷じてゐる。この見解は全く正しい。岡崎博士はこの次第を明解に述べられ、幾多の傾聽すべき論がある。<sup>③</sup>後漢に於てもこの風依然として變化なく、太學を卒業すると云ふことは官途に就く最捷徑であつた。光武佐命の臣鄧禹は光武と同學の士であり、その他にも太學を卒業して官吏となつたもの數多い、<sup>④</sup>祭遵が士を取る場合必ず儒術を用ひた如く、後漢では官吏となるには經明行修でなければならなかつた。趙翼二十二史劄記卷四「東漢功臣多近儒」に於て多くの例を擧げてこのことを説いてゐる。

逸民傳Aは何れも太學に學び充分に經書に對する素養を有し、出でては廟堂に立つべき好機に際會しながら尙且つ隱居して祿利の道と絶ち、或は著作し或は優游したと云ふことは確かに特異の事實である。而して後漢時代にはこの逸民傳以外にAの型に屬する儒者が相當多數に上つてゐる。ここに一々の例をあげることが省略するが、後漢代特にその末期に於ては、官學である太學と對抗して、隱居教授の風頗る盛んにして、後漢の經學は私學に於て、自由にして且つ清新なる討究が續けられたものと言ふべきである。そしてその最大なるものは鄭玄である。鄭玄の後漢經學史上に於ける地位は今更らここに述べる迄もない處である。鄭玄が經學史上不朽の名聲を贏ち得た所以のものの實に彼が太學に學び、更らに馬融の門に入り、而る後郷里に歸つてから度々の徵召に應ぜず、全く祿利の道から離れて専ら經書の研究に没頭したことに歸すべきである。彼れこそは眞に逸民傳Aに入れるにふさはしい人物である。鄭玄の傳を案すると弟子遠方より至るもの數千とある。私塾に於ける經學の隆盛を偲ぶべきである。<sup>⑤</sup>

又鄭玄の外にも列傳卷四十三に、周燮・黃憲・徐穉・姜

臆申屠蟠を一括して傳を立ててゐるが、これ等何れも儒者として一流の人物であつたが、或は風流を事とし或は隱居して仕へなかつた。<sup>⑥</sup>即ちここに於て經學が政治と離れ、純粹の學問としてのみ存在したことを物語るものである。斯る風潮は確に後漢末期を特色付ける事實であり、而してこの風既に後漢の初期に於て見出される處である。范泰の言ふ逸民Aとは斯る人物を指してゐるのであつて、彼等は老莊を信奉して清談を事とする隱逸の輩でもなく、又經學を以て官途に碌々たる書生の徒でもない。後漢に於ける斯る逸民は前漢以來の儒教特に官學に對する一種の反動であつて、「通經致用」の行はるるにつれ、曲學阿世の風盛んにして、學問的には漸次に固陋沈滞して章句の學となり、社會的には現世の利祿に汲汲たる俗儒となつた經學に對する或る種の反抗である。彼等Aの學問上の業績は世に傳らぬけれども、然し私は唯彼等が一流の經學者でありながら而かも經學を利祿の道より全く絶つた點に特殊なる意義を有すると考へるのである。(九月二十五日)

# 【註】

① 歷代正史の隱逸傳を見ると、(一)老莊思想又は佛教思想によ

つて超世・遁世を目的とする隱君子が大多數を占めてゐる。又(二)前代の王朝に對して節操を守り新王朝に仕ふるを潔しとせぬものもある。大體この二つに類別することが出来る。然し後漢書逸民傳Aの型の人物も少數はある。一例をあげると、晉書隱逸傳に見える霍原等の如きはこれである。

② 後漢書逸民傳Aの内その最初の二人、即ち野王二老・向長については疑問が多い。沈欽韓は野王二老の記事を以て「此與新序雜事篇晉文公逐麋、農夫所對相類、後人剽竊傳會耳」と言ひ、又向長に對しては「此篇全用高士傳」と言つてゐる。(後漢書疏疏卷十參照) この二人はA型の他の人物と異つた類型を持つてゐるので、私は恐らく後世の竄入であると思ふ。その理由はこの小論を讀破すれば自ら明瞭であらう。故にこの二人を逸民傳Aより省くことにする。

③ 岡崎文夫博士「魏晉南北朝通史」四九六頁以下に於て、前漢の儒學を以て「通經致用」とし、後漢の經學を以て「移風易俗」と斷じてゐる。この說正しい。元來儒學は武帝によつて國家統治の方策として表章されたものである限り、利祿との間に關係が生ぜざるを得ない。而して私は後漢の逸民はこの移風易俗に對しても、大なる役割をなしたものであると思ふ。

④ 漢代太學については別の機會に小論を草するであらう。唯結論を述べれば大學は初めは官吏の養成所であり、漸次に處士横議の府となつた。

⑤ 後漢書には教授の文字を以てこれを現してゐる。列傳卷一六・一七・一九・二五・三九・四一・四三・四四・五三・五四・五五・五七・五八・六五・六七・六九上下。

⑥ 後漢書に隱居隱身等の文字散見してゐる。列傳卷一七・四一・四三・四四・四六・五二・五三・五七・六九上下・七一・七二上下。